HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	南国土佐をあとにして
Author(s)	敷田, 麻実
Citation	朝日新聞
Issue Date	2003-08-02
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/34965
Rights	本著作物は、朝日新聞社の許可のもとに掲載しています。朝日新聞社の許可なく内容の全部又は一部を転載することを禁じます。承諾番号23-3141
Type	column
Note	石川版朝刊10版25面掲載、金沢アンダンテ
File Information	1281.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

食卓アンダンテ

題字は五木寛之氏

南国土佐をあとにして

敷田 麻実 ①

漁船で「現場体験」

やがて地球の食糧は欠乏すると騒がれていた70年代の終わり、「食糧危機が来るぞ」と繰り返していたマスコミに影響され、食料生産に関係する水産系の学科に進学した。北陸育ちだったので、暖かい土地にあこがれて土佐の高知を選んだ。

石川を遠く離れた高知での暮らしは楽しかった。旧制高校のような大学寮で、友人や先輩と呑み、語らい、アルバイトに明け暮れて、ほとんど勉強はしなかった。だいたい水産系の学科に進みながら、漁業にたいした思い入れがなく、大学での勉強には身が入らない。それにクラスの同級生たちは、大半が「生物マニア」、残りもほとんどが「釣り好き」で、「打算的学生」の私は、魚や生物に夢中になる彼らと話が合うどころではなかった。

クラスの中で自分に何も特徴がないことに気がつき、焦った。そこで、「現場の経験で箔をつけよう」と思い、休学して高知県の室戸からマグロ漁船に乗りこんだ。

3カ月間を過ごしたマグロ漁船「第七玉宝丸」の前で＝81年9月、寄港地のグアムで（敷田さん提供）

仕事はきついうえに、漁には不慣れで、先輩漁師から怒鳴られっぱなしだった。今までキャンパスで気楽に暮らしていた大学生にとって、名前も「大学」としか呼んでくれない船の生活は、たとえ自分で「志願」した乗船でも、過酷で辛かった。当時の日記には「くそ、なにくそ」とばかり書き殴ってある。

この体験はその後ずいぶん役に立った。プロとして仕事を仕上げる厳しさを自覚できたし、県に勤めてからの漁業者とのやり取りには、この時に身につけた「感覚」によく助けられた。

しきだ・あさみ　60年、加賀市生まれ。高知大卒後、83年から15年間県水産課に水産の技術職として勤務。90年から14ケ月間、豪・ジェイムスクック大大学院に留学し、沿岸域管理学を専攻。96年、金沢大大学院博士課程修了。98年に金沢工業大助教授、02年に同教授。全国の研究者や活動家と連携して、海岸ゴミ問題に取り組んでいる。

マグロ漁船での3カ月の「現場体験」は、私を勉強熱心な学生にした。水産業の勉強は、自分に与えられた使命だとばかり意気込み、ずいぶん理屈っぽくなっていた。卒業後は、水産試験場で栽培漁業の研究をしたいと思い、県職員を志望した。県の採用面接の際に「今後の石川の漁業をどうする」と問われて、「平等な漁業を実現する」と真顔で答えて、今思いだすと冷汗三斗だ。

研究職に就きたいという「期待」は見事に裏切られる。当時の水産課長が、「こいつは行政」と県庁の水産課に配属したからだ。それが行政職員としての一五年間の「役人生活」の始まりだった。

1983年4月、春爛漫の広坂庁舎で仕事が始まった。